

## 高齢者の生きがいに関する社会心理学的研究

白神克義・犬飼義秀

### 緒 言

高齢化の進展に伴い、高齢者の生きがい問題が大きな関心を集め、その対策が各方面からなされ始めている。生きがいという概念を英語で的確に表現する用語はないが、敢えて言えばself-realization（自己実現）に近いかもしれない。役割理論の立場からみると社会から課せられる役割期待(role expectation)と、自分自身について自らが規定している自己概念が一致している状態であるといえる。またエリクソン(Erikson, E. H.)<sup>1)</sup>の用語を使えば、アイデンティティが統合されている状態と定義できよう。生きがいというのは充実感と密接に関係し、社会関係の中に自己を明確に位置づけることができ、その中で何をなすべきかについて自覚できる状況にある時、人びとは充実感を持ち生きがいを感じると考えられる。つまり生きがいとは、人が生きていくことへの意味づけであり、所属する社会が所有する価値を通して人生への意味賦与をし、それが本人には生きがい感として実感される。

この高齢者がいかに安定し充実した生活を送るかという『高齢者の生きがい』に関する問題は、最近に始まったことではない。従来から社会教育や家族問題の領域で取り上げられ論じられてきた。しかしこの高齢者の問題は、社会的関心事となり、従来とは異なった受けとめ方がなされているように思われる。すなわち従来のような対応中心の考えから、新たな認識に立つことの必要性が問われているのである。

こうした高齢者の生きがい問題に対する認識の変化を生み出す背景として、第一に、高齢者が全人口の2割を超える社会における生きがい問題とは、高齢者が比較的少数であり部分的あるいは例外的な存在であった社会とは根本的に異なることである。高齢者が充実した生きがいのある生活を営むことができるか否かの問題は、高齢者本人にとって重大事であるだけでなく、社会全体としてもきわめて重大な意味を持つてくることである。

第二に、高齢者の増加によって彼らのニーズを充足させることの難しさが予想されるが、加えてそのニーズが多様化している状況、さらにこれまで高齢者の生きがいを支えてきた基盤そのものが崩れつつあることが指摘

きよう。とりわけ生きがいを支える基盤の問題は、きわめて深刻である。雇用構造の変化、核家族化の進展による家族構造の変化、生活意識や様式の変化などによって生きがいを支える基盤であった職場や家族がその役割を十分に果たせなくなりつつある。

今必要とされることは、高齢者の生きがい問題を従来の発想や施策を単に延長するだけでは対応できないことの自覚であり、その上で高齢者の生きがいとはいかなるものか、そして生きがいのある生活の実現に向けて何が要請されるかを根本的に問い直すことである。

そこで本研究は、まず高齢者の生きがいの構造をLawton. M. P (1975)によるP. G. C. モーラールスケール<sup>2)</sup>による測定から明らかにすることにある。次に、高齢者の生きがいを規定する要因は何かについて検討することである。

### 方 法

#### 1. 調査の概要

##### (1) 調査対象

岡山県内の厚生年金受給者 1,087名を対象とし、869名から回答を得た。対象者の性別・年齢構成は、表1に示している。

表1 調査対象者数 (人)

	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
全 体	18	338	444	69
男 子	1	249	389	60
女 子	17	89	55	9

##### (2) 調査方法

各地区の役員・世話人などを通して調査票の配布と回収を行った。なお、調査票全体の回収率は、79.9%であった。

##### (3) 調査時期

平成 2年11月～12月

### 結 果 と 考 察

#### 1. 高齢者の生きがいの構造

1975年, Lawton, M. P. によって開発された高齢者の主観的幸福感を測定するための22の質問項目を使用した。我が国でも本スケールの妥当性, 信頼性の検討がなされ, <sup>3)4)</sup>その測定の有効性についても多くの研究で

実証されている。<sup>5)6)7)</sup>

本研究ではこの22項目について, 林式数量化理論第III類(外的基準のない場合の多次元解析)の手法<sup>8)</sup>によりパターン分類を試み, 第5根までを算出した。生きがい

表2 生きがいのパターン分類 (数量化III類)

質問項目	カテゴリー	I 根	II 根	III 根
1. 自分の人生は年をとるにしたがって、段々悪くなっていくと感じますか。	1 ①. そう思う	-0.167	0.126	0.042
	2 ②. そうは思わない	0.056	-0.042	-0.014
2. あなたは去年と同じように元気だと思っていますか。	3 ①. はい	0.054	-0.050	-0.016
	4 ②. いいえ	-0.140	0.132	0.043
3. 寂しいと感じることがあります。	5 ①. ない・あまりない	0.057	-0.073	-0.005
	6 ②. 感じる	-0.125	0.159	0.010
4. 最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか。	7 ①. はい	-0.158	0.042	0.096
	8 ②. いいえ	0.063	-0.017	-0.038
5. 家族や親戚や友人との行き来に満足していますか。	9 ①. 満足	0.028	-0.032	0.039
	10 ②. もっと会いたい	-0.114	0.129	-0.158
6. あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。	11 ①. 思う	-0.057	0.067	0.045
	12 ②. 思わない	0.080	-0.096	-0.065
7. もし望む所に住めるとしたらどこに住みますか。	13 ①. ここがよい	0.007	0.011	0.308
	14 ②. よそに行きたい	-0.153	-0.229	-0.636
8. 心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか。	15 ①. ある	-0.112	-0.072	0.054
	16 ②. ない	0.053	0.034	-0.026
9. 年をとるということは若い時に考えていたより、良いと思いますか。	17 ①. よい	0.086	-0.138	0.067
	18 ②. 同じ・悪い	-0.038	0.062	-0.030
10. 生きていても仕方がないと思うことがありますか。	19 ①. ある	-0.226	-0.184	-0.127
	20 ②. ない・あまりない	0.016	0.013	0.009
11. あなたは、若い時と同じように幸福だと思いますか。	21 ①. はい	0.044	-0.001	0.056
	22 ②. いいえ	-0.184	0.004	-0.238
12. 毎日することがたくさんあると感じますか。	23 ①. はい	0.044	-0.098	-0.009
	24 ②. いいえ	-0.049	0.227	0.021
13. 悲しいことがたくさんあると感じますか。	25 ①. はい	-0.298	-0.211	-0.083
	26 ②. いいえ	0.031	0.022	0.009
14. 世の中は昔の方が良かったと思いますか。	27 ①. 思う	-0.037	0.003	0.063
	28 ②. 思わない	0.038	-0.003	-0.064
15. あなたには心配なことがたくさんありますか。	29 ①. はい	-0.212	-0.172	-0.045
	30 ②. いいえ	0.045	0.036	0.009
16. あなたの健康は良いと思いますか。良くないと思いますか。	31 ①. よい	0.060	-0.010	0.001
	32 ②. よくない	-0.153	0.025	-0.001
17. 前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか。	33 ①. はい	-0.102	-0.140	-0.016
	34 ②. いいえ	0.029	0.039	0.004
18. 生きることは大変きびしいと思いますか。	35 ①. はい	-0.045	-0.067	0.034
	36 ②. いいえ	0.065	0.097	-0.049
19. 今の生活に満足していますか。	37 ①. はい	0.029	0.025	0.060
	38 ②. いいえ	-0.171	-0.147	-0.128
20. 物事をいつも深刻に考えるほうですか。	39 ①. はい	-0.098	-0.150	0.131
	40 ②. いいえ	0.054	0.083	-0.073
21. 明日のことは思い煩う必要がないという人がいますがどう思いますか。	41 ①. そう思う	0.002	0.036	-0.115
	42 ②. そうは思わない	-0.002	-0.024	0.078
22. あなたは心配事があるとすぐおろおろする方ですか。	43 ①. はい	-0.129	-0.083	0.230
	44 ②. いいえ	0.041	0.026	-0.073
固 有 値		0.498	0.326	0.248

の第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲの各根におけるノーマライズされた個々の数値が表2である。さらにそれら各根を両軸としてプロットした結果を図1～図3に示している。各根の意味についてはそれぞれの項目の分布状況から、また高齢者の属性から生きがい全体の構造についての検討を行っ

図1 生きがい項目のパターン分類の結果  
(第Ⅰ軸×第Ⅱ軸)

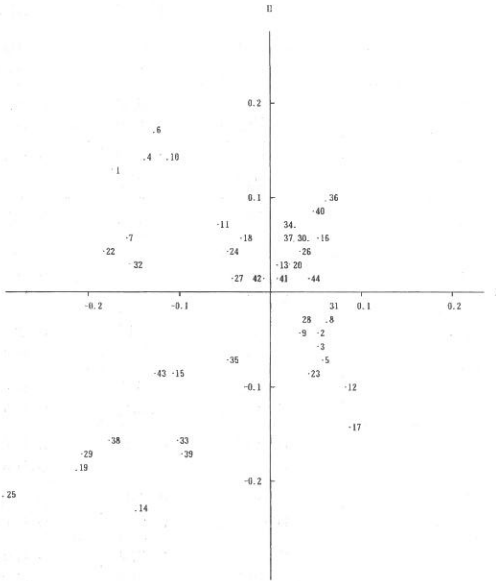


図2 生きがい項目のパターン分類の結果  
(第Ⅱ軸×第Ⅲ軸)

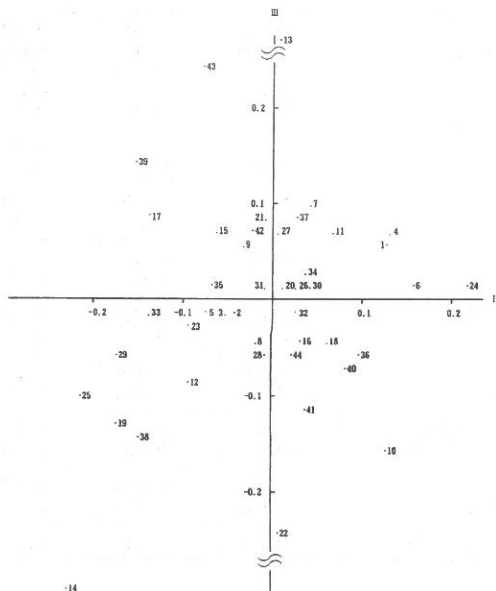
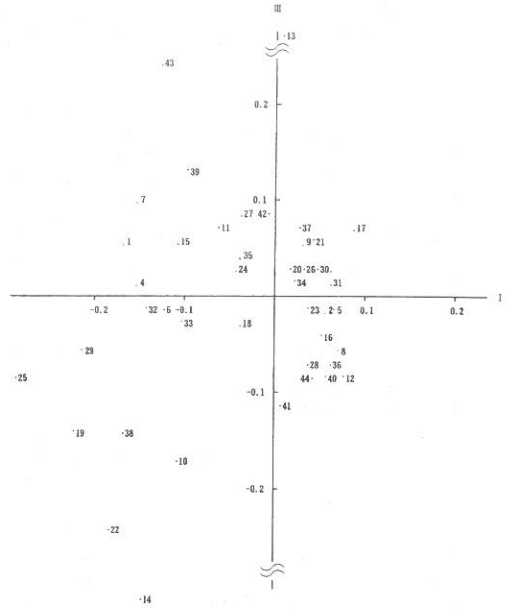


図3 生きがい項目のパターン分類の結果  
(第Ⅰ軸×第Ⅲ軸)



た。

表2より、第Ⅰ根は、プラス方向に「17. 年をとることは良い」「12. 年をとっても役に立つ」「36. 生きるとは厳しいことではない」「8. 小さなことは気にしない」「31. 健康である」などがあり、逆にマイナス方向に「25. 悲しいことが多い」「19. 生きていても仕方ないと思う」「29. 心配なことが多い」「22. 若い時のように幸福ではない」などが集まっている。Ⅰ根上のプラス方向には年をとっても生活への活力が持続している様子が、マイナス方向では悲しい・不幸といった生きることへの悲観的状況、すなわち加齢に伴う活力の減退が表われている。こうしたことからⅠ根は、生きることへの活力を弁別していると考えられる。

第Ⅱ根は、プラス方向に「24. 毎日することがない」「6. 寂しさを感じる」「4. 去年ほど元気ではない」「10. 家族・親戚・友人にもっと会いたい」「1. 自分の人生は年とともに悪くなる」があり、マイナス方向には「14. 望むところに住めるとしたらよそに行きたい」「25. 悲しいことが多い」「19. 生きていても仕方ないと思う」「29. 心配なことが多い」などが集まっている。Ⅱ根は、プラス・マイナス方向とも生活に対する不満・問題についてであるが、プラス方向は自己の社会における存在・社会関係についてであり、マイナス方向は自己の内面すなわち自分自身に向けられ問題を示している。このよう

にII根は、自己を取り囲む状況と内面との弁別に関するものであると推測される。

第III根は、プラス方向に「17.年をとることは良い」「37.今の生活に満足」「21.若い時と同じように幸福」「7.最近小さなことを気にする」があり、マイナス方向には「38.今の生活に不満」「22.若い時のように幸福ではない」「19.生きていても仕方がない」「25.悲しいことが多い」などが集まっている。このことからIII根は、生活に対する満足感・幸福感を示すと考えられる。

さらに、44の 카테고리 同士の位置関係をみるために、各根を両軸とする平面にそれぞれの カテゴリ・ウェイトをプロットしたものが図1～図3である。まず図1は、第I軸と第II軸で構成される平面であり、4つのパターンが存在している。第1のパターンは、両根の カテゴリ・ウェイトの符合がプラスの場合である。具体的には、「20.生きていても仕方がないなどと思わない」「37.今の生活に満足」「36.生きることは決して厳しいことではない」「40.物事をあまり深刻に考えない」「44.心配事があったもおろおろしない」などがある。これらは生活に満足し、物事を深刻に考えず、生きることへの活力を示すパターンを表わしている。同時にこうした活力が、日常生活における様々な事柄に対し、深刻に考えたり心配しないという態度と関係していることも示している。

第二のパターンは、第I軸がプラスで第II軸がマイナスのスコアによって構成される空間である。この空間には、「17.年をとることは良い」「2.自分の人生は年とともに悪くなっていない」「21.若い時と同じように幸福である」「5.寂しさを感じない」「9.家族・親戚・友人の行き来に満足」「23.毎日することがたくさんある」などがある。年をとること、生活に対する満足感・幸福感といったことから第一のパターンに類似している。しかし、こうした状況が内面的な側面よりも自己を取り囲む社会と強く関係していることを示している。すなわち、家族・親戚・友人の行き来があり自分の仕事を持つことで、社会との関係が保たれたり自己の存在を確認出来ることで、生きがいが高まると考えられる。

第三のパターンは、第I軸がマイナスで第II軸がプラスの符合の場合である。「24.毎日することがない」「6.寂しさを感じる」「1.自分の人生は年とともに悪くなる」「10.家族・親戚・友人にもっと会いたい」「4.去年ほど元気ではない」「11.年をとって前よりも役に立たなくなった」などの カテゴリ によって構成されている。このパターンは、第二のパターンと対照的に、周囲への働きかけや社会との関係が弱いため生きる活力に欠けるタイプである。

第四のパターンは、第I軸・第II軸ともマイナスの符合で構成される。該当する カテゴリ としては、「25.悲しいことが多い」「19.生きていても仕方ないと思う」「29.心配なことが多い」「38.今の生活に不満」「43.心配事があるとすぐおろおろする」などである。このパターンは、日常生活における様々な事柄を心配したり悲観的に考えたりすることで、生きる活力に欠けるタイプである。

以上のように、I軸とII軸との関係から高齢者の生きがいの構造には4つのパターンが存在することが分かった。このパターンを構成する基本的なものは、生きることへの活力と生活状況の2つである。さらにこの活力には、生きることを積極的・肯定的に考えるか消極的・悲観的に考えるかという2つの方向があり、生活状況においては、内面的側面と社会的側面の関係から4つの分類ができる。

この生きがい構造は、図2・図3の第I軸と第III軸との関係、第II軸と第III軸との関係においても見られる。しかし、こうした2つの軸の関係を3つの軸の関係へと多次元化すると、より具体的で特徴的な分類が可能になる。表3は、第I軸・第II軸・第III軸の原点を境にして各軸を正負に二分割し、その組み合わせによって構成される三次元空間にそれぞれの カテゴリ の配置状況を示したものである。その結果、A型からH型までの8つのパターンに分類できる。簡単にその特徴を指摘すれば、

- A型……日常生活における悩み・心配事などのストレスがなく、現在の生活に満足しているタイプ。
- B型……日常生活における悩み・心配事などのストレスを、うまくコントロールできるタイプ。
- C型……健康と人の行き来から幸福・生活の満足を得るタイプ。
- D型……自己が周囲に働きかけさらに受容されていると認知することで、現在の生活に満足しているタイプ。
- E型……周囲への働きかけや社会との関係が年々弱くなり、些細なことを気にしたり孤独であると感じたりするタイプ。
- F型……若い頃と比較し自分は不幸であると感じ、それを健康上の問題、家族・親戚・友人との交流の減少に帰属させるタイプ。
- G型……心配事におろおろしたり、物事をいつも深刻に考えるタイプ。
- H型……心配事・悲しいことが多く、今の生活に不満を持ち生きることに対し悲観的なタイプ。

表3より、生きがいのある生活とは理想的にはA型タ

表3 3次元空間によるパターン分類

	I 軸	II 軸	III 軸	該 当 カ テ ゴ リ ー	属 性 区 分	対象者の分布(%)		
						全体	男子	女子
A型	+	+	+	13) ずっとここに住んでいたい。 20) 生きていても仕方ないなどと思わない。 26) 悲しいことなどない。 30) 心配なことなどない。 34) 前ほど腹を立てることがない。 37) 今の生活に満足している。		11.6	12.0	9.9
B型	+	+	-	16) 心配だったり、気になったりして眠れないことはない。 36) 生きることは決して厳しいことではない。 40) 物事をあまり深刻に考えない。 42) 明日のことは思い煩う必要はない。 44) 心配事があってもおろおろしない。	70 歳 代 男 性	17.4	20.4	5.4
C型	+	-	+	9) 家族・親戚・友人の行き来に満足。 17) 年をとるということは良い。 21) 若い時と同じように幸福である。 31) 健康である。	子 供 と 同 居	16.3	15.6	18.7
D型	+	-	-	2) 自分の人生は年とともに悪くなっていない。 3) 去年と同じように元気である。 5) 寂しさを感じない。 8) 小さなことは気にしない。 12) 年をとっても役に立つ。 23) 毎日することがたくさんある。 28) 昔より今が良い。	配 偶 者 有 り	17.6	16.2	23.1
E型	-	+	+	1) 自分の人生は年とともに悪くなる。 4) 去年ほど元気ではない。 6) 寂しさを感じる。 7) 最近小さなことを気にする。 11) 年をとって前よりも役に立たなくなった。 24) 毎日することがない。 27) 世の中昔のほうが良かった。	80 歳 代 配 偶 者 と 離 死 別	9.6	9.5	9.9
F型	-	+	-	10) 家族・親戚・友人にもっと会いたい。 18) 年をとるということは良くない。 22) 若い時のように幸福ではない。 32) 健康とはいえない。	子 供 と 別 居	6.9	6.7	7.7
G型	-	-	+	15) 心配だったり、気になったりして眠れないことがある。 35) 生きることは厳しいことである。 39) 物事を深刻に考える。 41) 『明日のことは思い煩う必要はない』という意見に反対。 43) 心配事があるとすぐおろおろする。	50・60 歳 代 女 性	11.1	8.1	23.1
H型	-	-	-	14) 望む所に住めるとしたらよそに行きたい。 19) 生きていても仕方ないと思う。 25) 悲しいことが多い。 29) 心配なことが多い。 33) 以前に比べて腹を立てることが多い。 38) 今の生活に不満。		9.6	11.5	2.2

イブである。しかし現実には、C型・D型に代表されるように健康で社会関係の中に自己を明確に位置づけることができ、B型のように日常生活において悩み・心配ことなどのストレスをうまくコントロールできることが重要である。さらにこれら8つのタイプと対象者の属性の関係では、B型には男性、年齢では70歳代の人分類される。C型は子供達と同居している人、D型は配偶者が健在である人がこのタイプである。生活への不満・生きる活力の低いE～H型では、E型の属性としては、配偶

者と離死別した人、年齢では80歳以上の人該当する。F型は子供達と別居している人、G型は女性、50・60歳代の人がこのタイプに分類される。以上のように、数量化理論第III類による分類から高齢者の『生きがい』の構造を明らかにした。しかし、高齢者の生きがいに様々なタイプが存在ということは、これらの差異を生じさせているものについても検討しなければならない。次に、高齢者の生きがいを規定する要因は何かについて検討する。

2. 高齢者の生きがいを規定する要因

表2における22の設問に対しそれぞれ2つのカテゴリーを用意し、○印の数字に回答すると1点を与え、その合計点を各対象者の生きがい得点と考えた。この得点が高

くあるいは低く規定されるのは、いかなる説明変数がどのように作用しているためなのかを分析しようとするのがここでの課題である。この種の目的のために多く使われる分析方法は回帰分析であるが、ここで用いる22の設

表4 生きがい得点に対する数量化I類の結果

重相関係数：0.9414

質 問 項 目	カ テ ゴ リ ー	回答者数	カテゴリー・ウェイト	レ ン ジ (順位)
1. 自分の人生は年をとるにしたがって、段々悪くなっていくと感じますか。	1	220 649	-0.705 0.237	0.942 (12)
	2			
2. あなたは去年と同じように元気だと思っていますか。	3	627 242	0.303 -0.792	1.095 (3)
	4			
3. 寂しいと感じることがありますか。	5	595 274	0.357 -0.780	1.137 (1)
	6			
4. 最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか	7	246 623	-0.731 0.290	1.021 (7)
	8			
5. 家族や親戚や友人との行き来に満足していますか。	9	694 175	0.183 -0.732	0.915 (15)
	10			
6. あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。	11	509 360	-0.395 0.562	0.957 (11)
	12			
7. もし望む所に住めるとしたらどこに住みますか。	13	827 42	0.034 -0.700	0.734 (22)
	14			
8. 心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか。	15	280 589	-0.575 0.274	0.849 (21)
	16			
9. 年をとるということは若い時に考えていたより、良いと思いますか。	17	270 599	0.650 -0.291	0.941 (13)
	18			
10. 生きていても仕方がないと思うことがありますか。	19	60 809	-0.956 0.069	1.025 (6)
	20			
11. あなたは、若い時と同じように幸福だと思いますか。	21	701 168	0.173 -0.729	0.902 (19)
	22			
12. 毎日することがたくさんあると感じますか。	23	605 264	0.313 -0.723	1.036 (5)
	24			
13. 悲しいことがたくさんあると感じますか。	25	83 786	-0.879 0.091	0.970 (10)
	26			
14. 世の中は昔の方が良かったと思いますか。	27	439 430	-0.451 0.463	0.914 (16)
	28			
15. あなたには心配なことがたくさんありますか。	29	153 716	-0.872 0.184	1.056 (4)
	30			
16. あなたの健康は良いと思いますか。良くないと思いますか。	31	623 246	0.286 -0.729	1.015 (8)
	32			
17. 前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか。	33	192 677	-0.711 0.199	0.910 (17)
	34			
18. 生きることは大変きびしいと思いますか。	35	511 358	-0.450 0.647	1.097 (2)
	36			
19. 今の生活に満足していますか。	37	742 127	0.131 -0.775	0.906 (18)
	38			
20. 物事をいつも深刻に考えるほうですか。	39	312 557	-0.625 0.348	0.973 (9)
	40			
21. 明日のことは思い煩う必要がないという人がいますがどう思いますか。	41	351 518	0.527 -0.355	0.882 (20)
	42			
22. あなたは心配事があるとすぐおろおろする方ですか。	43	210 659	-0.702 0.221	0.923 (14)
	44			

明変数は、その数値が数量によってではなくカテゴリーによって与えられる定性的変数である。被説明変数が定量的変数であって、説明変数が定性的変数である場合には、通常の最小二乗法を用いての回帰分析の手法は適用できないから、林式数量化理論第Ⅰ類<sup>9)</sup>を用いることになる。

表4は、生きがい得点を被説明変数とし、22の説明変数とした数量化理論第Ⅰ類の分析結果を示したものである。

カテゴリー・ウェイトとは、個々のサンプルが当該カテゴリーに属することが被説明変数をどの方向にどれだけ（絶対値）押し動かすかの度合いを表わしている。カテゴリー・ウェイトのプラス符合は生きがい得点を高め

る方向に、マイナスは逆の方向に働いていることが分かる。さらにレンジに示される数値より、「3. 寂しいと感じるかどうか」「18. 生きることを厳しいと感じるかどうか」「2. 去年と同じように元気であるかどうか」「15. 心配なことがあるかどうか」「12. 毎日することがあるかどうか」「10. 生きていても仕方ないと感じるかどうか」「4. 小さなことを気にするかどうか」「16. 健康の状態」「20. 物事を深刻に考えるかどうか」「13. 悲しいことがあるかどうか」が生きがい得点を規定する重要な変数であると考えられる。

特に、日常生活における事柄を気にし深刻に考えることで、悲しさ・心配というストレスを生み、日々の生活において自発的行動力が弱く社会関係の中に自己を位置

表5 生きがい得点に対する数量化Ⅰ類の結果（属性）

重相関係数：0.4283

属性要因	カテゴリー	回答者数	カテゴリー・ウェイト	レンジ（順位）
1. 性別	1. 男性	699	0.059	0.3037 (11)
	2. 女性	170	-0.244	
2. 年齢	1. 50-59歳	18	-0.608	0.7593 (8)
	2. 60-69歳	338	-0.141	
	3. 70-79歳	444	0.151	
	4. 80歳以上	69	-0.122	
3. 配偶者の有無	1. 配偶者あり	739	0.087	0.5793 (9)
	2. 配偶者と離死別	130	-0.493	
4. 家族数	1. 1人	51	-0.339	0.4040 (10)
	2. 2人	369	0.037	
	3. 3-4人	137	-0.120	
	4. 5人以上	312	0.064	
5. 同居・別居	1. 同居	439	0.422	0.8532 (7)
	2. 別居	430	-0.431	
6. 心身の状態	1. 体も気持ちも元気	329	0.800	2.5563 (3)
	2. 体力はあるが気持ちが老けた	30	-1.035	
	3. 気持は若いが体力が落ちた	428	-0.206	
	4. 体も気持ちも衰えた	82	-1.756	
7. 体力	1. 大いに自信がある	111	0.657	2.8253 (1)
	2. まあ自信がある	526	0.250	
	3. あまり自信がない	212	-0.761	
	4. 全く自信がない	20	-2.169	
8. 仕事	1. 家事などの軽労働	411	0.044	1.4334 (5)
	2. 軽度の筋肉労働	195	0.243	
	3. 中度の筋肉労働	118	-0.364	
	4. 神経を使う労働	68	0.605	
	5. 何もしていない	77	-0.828	
9. スポーツチームへの入会	1. 入会して活動している	344	0.987	1.6329 (4)
	2. 入会していない	525	-0.646	
10. 運動不足感	1. 非常に感じている	95	-1.005	1.3939 (6)
	2. 少し感じている	277	-0.351	
	3. あまり感じない	292	0.389	
	4. 全く感じない	205	0.386	
11. スポーツ観	1. 見ることも・することも好き	328	0.728	2.6709 (2)
	2. 見るよりもする方が好き	95	0.816	
	3. することよりも見る方が好き	324	-0.278	
	4. することも見ることも嫌い	122	-1.855	

づける機会が少なくなることで、衰えを意識したり寂しさを感じる様になると考えられる。その結果、生きることを厳しく捉えたり、生きていても仕方ないという考えにつながるかと推測できる。

次に、生きがい得点の規定要因を対象者の属性との関係から検討してみると、表5のような結果になる。

表5より、規定力の高い属性として「7. 体力についての自信度」「11. スポーツ観」「6. 心身の状態」「9. スポーツチームへの入会の有無」が上位にある。つまり、同年代の人と比較して体力に自信があり、心身とも元気であると認知している者ほど生きがい得点が高いことを示している。また、スポーツチームへ参加し継続的な活動をしていたり、スポーツをすることに好意的態度を示す者ほど生きがい得点が高い。このことは、生きがいの規定要因として健康であることの重要性について、さらに高齢者の健康にとって運動・スポーツの果たす役割についての検討課題を提起している。

以上検討したように、高齢者は身体的衰えからくる不安、職業生活からのリタイヤに伴う不安、家族内地位・役割の再適応による不安を抱き、アイデンティティ危機に直面していると見られる。そして、今日の社会経済状況は、これらの不安をますます増幅する方向にある。このことは、現状を放置していたのでは高齢者が生きがいのある老後生活を営むことが困難であることを示唆していると同時に、企業や家族に代わる新たなアイデンティティの核を創出する必要性を示唆しているといえる。

総理府の「国民生活に関する世論調査」によると、生活で充実感を感じる時はどのような時かという質問で、60歳以上の人びとについてみると、「家族団らん」「休養」「仕事」などの割合が高いものの、昭和50年から56年にかけて前二者の割合が減少し、これに代わって「友人・知人との会合」「趣味・スポーツ」「社会奉仕・社会参加」の割合がかなり増大している。こうした変化は、高齢者において、アイデンティティの基盤が職場や家庭に過度に置かれる状況から、徐々にではあるがそれ以外の対象にも拡大していることを意味している。したがって、そういった高齢者に起こりつつある志向の変化を助け促進するものとして、コミュニティ活動や教育・学習活動の重要性が増しているといえる。

## 要 約

本研究は、高齢者の生きがい構造と生きがいを規定する諸要因を検討することを目的とした。主な結果は次のようであった。

1. 高齢者の生きがいの構造を明らかにするため、数量

化理論第Ⅲ類を適用した。その結果、第Ⅰ根から第Ⅲ根までの三つの軸が抽出された。

2. Ⅰ根上のプラスの方向には年をとっても生活への活力が持続している様子が、マイナス方向には活力の減退の様子が表われている。第Ⅰ根は、生活に対する活力を弁別する軸である。第Ⅱ根は、プラス方向に周囲・社会との関係についてマイナス方向に自己の内面に関する不満・問題を表わしている。この第Ⅱ根は、生活の不満・問題の帰属の所在を弁別する軸である。第Ⅲ根は、生活全体に対する満足感・幸福感を弁別する軸である。
3. 第Ⅰ軸・第Ⅱ軸・第Ⅲ軸の原点を境にして各軸を正負に二分割し、各組み合わせで構成される三次元空間から生きがいについて8つの分類を試みた。
  - A型—日常生活における悩み・心配事などのストレスがなく、現在の生活に満足しているタイプ。
  - B型—日常生活における悩み・心配事などのストレスを、うまくコントロールできるタイプ。
  - C型—健康と人の行き来から幸福・生活の満足を得るタイプ。
  - D型—自己が周囲に働きかけさらに受容されていると認知することで、現在の生活に満足しているタイプ。
  - E型—周囲への働きかけや社会との関係が年々弱くなり、些細なことを気にしたり孤独であると感じたりするタイプ。
  - F型—若い頃と比較し自分は不幸であると感じ、それを健康上の問題、家族・親戚・友人との交流の減少に帰属させるタイプ。
  - G型—心配事におろおろしたり、物事をいつも深刻に考えるタイプ。
  - H型—心配事・悲しいことが多く、今の生活に不満を持ち生きることに対し悲観的なタイプ。
4. 8つのタイプと対象者の属性との関係では、B型には男性、70歳代の人が多い。C型は同居者、D型は配偶者が健在である人に多く見られる。生活への不満・活力の弱いE～H型では、E型の属性としては配偶者と離死別した人、年齢では80歳以上の人が該当する。F型は別居者、G型は女性、50・60歳代がこのタイプに分類される。
5. 生きがいを規定する重要な要因として、「寂しさを感じるかどうか」「生きることを厳しいと感じるかどうか」「健康の状態」「心配事があるかどうか」「毎日することがあるかどうか」「小さなことを気にするかどうか」「物事を深刻に考えるかどうか」などがある。



6. 規定力の高い属性として、同年代の人と比較して体力に自信があり、心身とも元気であると認知している者ほど生きがい得点が高い。スポーツチームへ参加し 継続的な活動をしていたり、スポーツをすることに好意的態度を示す者ほど生きがい得点が高い。

### 引用・参考文献

- 1) Erikson, E.H. : Identity and the life cycle. Psychological Issues, No.1, Monograph 1. 1959 (小此木啓吾訳『自我同一性』 35-46頁 1973 誠信書房)
- 2) Lawton, M.P. : The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale. A revision. J. of Gerontology 30(1) : 85-89, 1975.
- 3) 古谷野直 : モラール・スケール、生活満足度および幸福尺度の共通次元と尺度間の関連性. 老年社会科学 4 : 142-154, 1982.
- 4) 藤田利治, 旗野脩一, 大塚俊男他 : 長寿と「生きがい」. 医学のあゆみ, 132(13) : 981-986, 1985.
- 5) 谷口幸一 : 高齢者の運動 - スポーツ活動とメンタルヘルス. 老年社会科学10(2) : 113-138, 1988.
- 6) 谷口和江, 浅野仁, 前田大作 : 身体的活動レベルの高い男性高齢者のモラール. 社会老年学 12 : 47-58, 1980.
- 7) 谷口幸一 : 運動が高齢者のメンタルヘルスに及ぼす影響. 臨床スポーツ医学 4 (12) : 1403-1411, 1987.
- 8) 渡辺洋編著 : 多変量解析入門 : 148-162, 福村出版, 1988.
- 9) 前掲書 8) : 133-140.
- 10) 福武直, 青井和夫編 : 高齢社会の構造と課題 : 東京大学出版会, 1985
- 11) 福武直, 小山路男編 : 高齢社会への社会的対応 : 東京大学出版会, 1985.

平成3年8月21日受付

平成3年8月26日受理